

裏配管マニュアル

注意！

本資料は教科書通りではない、またはメーカーに推奨されていないような内容も含んでいます。施工時は確認の上で必ず自己責任で行っていただきますようお願いいたします。

1. 塩ビ管の炙りによる曲げ配管

新築ではまずあり得ない話ですが、改修工事では矩（かね）が出ていない管同士を結ぶなんてこともしばしば。そこで使う手段が「炙りによる曲げ配管」です。

塩ビ管をトーチを使って焦げない程度の良い塩梅で炙り、パイプが柔らかくなったら即座に曲げるのです。トーチの微妙な操作やスピードが要求されるため、非常に高難度な裏技になります。

パイプの変形や破損の可能性もあるため、どうしてもという時にだけ使いましょう。年配の職人の中には「炙りができて一人前」なんていう人もいるくらい難しいです。

2. 継手まで被る圧着ソケット

もしねじ込み配管の道中で漏水が発覚したら、本来は先をバラして配管し直したりフランジを入れたりして直します。

ですが、コストや時間的な制限がある場合、圧着ソケットを使うこともあります。これは裏技ではないですが、配管自体はいじらずに上から被せ物をしている形になります。

直感部に使えるタイプだけでなく、継手ごと被せられるタイプもあるので、エルボのねじ込み部などに使用することもできるのです。

3. ビスが効かなくなった時の詰め物

ビスで何かを取付けている際に“バカになる”ことがありますよね。クルクル空回りしてしまう状態です。そんな時に何か詰め物をしてビスを効かすのは常套手段。

ビスに専用の細長いプラみたいなのが付属していることもありますが、なければ、割り箸（適度に小さくする）・爪楊枝・細い針金などが使えます。たまに細かい砂利みたいなのを詰めちゃう人もいますが、さすがにそれはNGかと。

4. 器具のねじ込みに接着剤を使う

器具付で発生するねじ込みに塩ビ管用の接着剤を使う人は結構います。もちろん、接着剤単体ではなく、シールテープ+接着剤（透明タイプ）です。

この利点は何より、「見た目が綺麗」なこと。ヘルメシールやその他シール材を使うと、器具にベトベトついてしまったり、ねじ部からはみ出て見た目が悪かったりします。それを防いで尚且つシールテープもまとまってくれるわけです。

シールテープを使っているのでまず漏れることはありませんが、その止水性能は定かではありません。

5. ストラブで鋳鉄管とVPを接続する場合

ストラブは主に仮設配管や通気管で使用します。今回のケースも改修時の仮つなぎです。古い建物には排水管に鋳鉄管が使われていることも多いですが、VPと仮つなぎしなければならぬこともあります。

通常はMD継手のSS（スルーソケット）で専用のパッキンを使用して接続します。ただ、もしストラブしかなければ、管の外径が違いますから細い方（鋳鉄管）を太らせなければなりません。

なのでストラブが当たる箇所に防食テープをグルグル巻くなどして対応することになるでしょう。あくまでも仮つなぎなので、本接続するまで耐えられれば良いのです。

6. 架台の水平・垂直を出すためにワッシャーを挟む

床・天井・壁、配管固定のためあらゆる場所に鋼材架台を取付けることがありますよね。それらは人間が作るものですから、完全に水平垂直が出ているとは限りません。特に天井のデッキ面は水平であることの方が少ないです・・・

そんな箇所に鋼材を取付けようとすれば当然曲がるわけですが、手っ取り早く修正するならワッシャーを挟むのが常套手段です。3分・4分・M16など現場であればいろんな厚みのものが揃っていると思います。

ちなみに、本来はコの字型の専用のスペーサーがあります。

7. 地獄配管の飲み込みを微妙に短くする（塩ビ管の接着）

地獄配管は「両方向から配管が向かってきており接続の“逃げ”がしにくい状態」のこと。この場合、飲み込みを確保するように両方向を離れる方向にあおって配管するしかありません。

塩ビ管の接着の場合「飲み込み×2」を確保しなければならないため条件的に厳しいのですが、その場合はほんの少しだけ（例えば両側3～5mmずつ）短くするだけでグンと楽になります。

飲み込みを少し短くした分、飲み込みのマーキングは調整してくださいね。

8. 漏水したねじ込みを増し締めで直す

ねじ込み部から漏水した場合に「増し締め」で直るならそれに越したことはありません。本来は一旦ねじ込みを外してからねじ込み直すべきですが、漏水が止まれば機能としては問題ありません。

ただし、注意しなければならないのは、シールテープや不硬化タイプのシール材にしか通用しないということ。硬化するタイプのシール材では逆に縁が切れてしまい、シール性能が失われます。

9. 躯体をトーチで炙って乾かす

コンクリート面が濡れていて仕事にならないケースがあります。例えば、配管のスラブ貫通部にAパッドを貼りたい時や墨出しをしたい時など。墨出しくらいならウエスで拭けばなんとかなるかもしれませんが、Aパッドは完全に乾いてなければしっかりと貼りつきません。

そこで登場するのがガストーチです。大まかにウエスで水分を拭き取ってから熱すれば、どんどん乾いていきAパッドも余裕で貼れるようになります。

ただしこれは本当に必要な時だけにしてください。なぜなら、トーチでコンクリートを炙ると強度が下がってしまうからです。

10. ナイスジョイント用ハンディ拡管機で30suを拡管する

ナイスジョイントの拡管機には置き型・セパレートなどいくつかの種類がありますよね。その中でも充電式のハンディータイプは、既に配管されている箇所に対しても拡管ができます。

ただ、パワーが小さいため対応しているサイズが13SU~25SUまでと細物に限られているのです。

とはいえ、実は30SUなら電池をフル充電したばかりなら拡管可能です。ゲージによるチェックは必要ですが、私も過去に数回やっていてテストもクリアしています。

11. 間違って接着した塩ビ管を強引に外す

塩ビ管を接着後に間違いに気がつき、外したくなることがあります。接着したてなら両手でひねれば外れるでしょう。ただ、少し時間をあけてしまうとさすがにそうはいきません。

そうならばまずはヤトイをつけて継手をつかむより力を入れられるようにします。それでもダメなら傷付くのを覚悟してパイプレンチをかけて回しましょう。接着してから数分後くらいなら外すことができますと思います。

それ以外でどうしても外したい場合には、レバブロックとナイロンスリングを使うというのも手です。いずれにしても、傷ついた継手やパイプは使えなくなりますので注意です。